Vol.07 (2003.7.15)

インベストライフ

「長期投資仲間」通信 In Best Life

JUL 2003 第7号

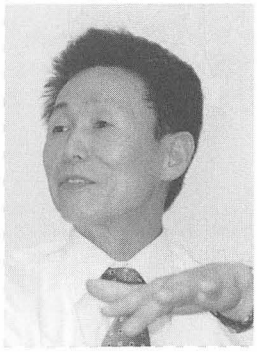
特集座談会・第1部

② 年収400万円時代のライフプランニング

「これからは不要なものは削ぎ落とす、『切り捨てる生き方』の時代が始まっていると思います。
　でも、切り捨てたから貧しくなるということではなくて、逆に贅肉が取れて動きやすくなる面の方を強調したいんですね」

伊藤宏一

和泉昭子


澤上篤人

特集座談会・第2部

⑪ 不況時代を生き抜く知恵　上野茂樹　澤上篤人　平山賢一

⑯ Reader's Essay　長期投資仲間からの寄稿
経営者は、スーパーマンを目指す
――インタビュアーとして感じた企業経営者の知恵――　小笹俊一

⑱ ポートフォリオ理論を越えて
グランド・サイクルをとらえた運用、
シクリカル・インベストメント(Cyclical Investment)の提案　平山賢一

㉓ ようこそ直接金融の世界へ(その7)
資産運用ビジネスは直接金融の土台となる　澤上篤人

㉘ やさしい投資理論講座 7
将来の投資収益を予測する　真壁昭夫

㉚ ライフデザインの世界　第7回
ネットワークのデザイン

㉞ Q&A 運用・何でも相談室
株価はその企業にとって、どんな影響があるのでしょうか？

㊱ ファイナンシャル・インデペンデンス達成のための資産運用のプランニング6
生命保険を見直す　伊藤宏一

⑰ Investor's View　いくら長期投資に回しますか？
㉝ 今月の一冊　ロバート・G・ハグストロームJr著『バフェットの法則』　菅淑郎
㊵ お知らせ・次号予告・編集後記

ホームページ　http://www.sansara.co.jp/invest/

特集座談会・第1部

伊藤宏一
（ファイナンシャルプランナー　本誌編集主幹）

年収400万円時
ライフプラン

終身雇用でだれもが順調に収入が伸びていく
はすでに昔のもの。代わりに夫婦共働きでやっ
それで家計を支えなければならないような時代
しかし、悲観ばかりでは始まらない。右肩上か
意識と行動にムダを溜め込んでこなかったか。
そのムダを切り捨て、身軽になって未来へ向に
から、新たな経済が展開していくのではないた

「人並み」のライフプランは もはや通用しない

伊藤：僕はライフプランのセミナーなどで、よく地方の方とお話しする機会があるんですが、痛感するのは、今の不況は首都圏よりも地方の方が一段と深刻なことです。

都会の人は驚くかもしれないけれど、夫婦共働きでやっと年収が350万円とか400万円、それで一家を支えて生活しているという人たちがたくさんいるんです。

澤上：東京のような大都市では今のところ「不景気だ、大変だ」と言いつつも、結構仕事はあるし、「デフレでモノが安く買えていい」なんて言っていられるけれど、おそらくこれは嵐の前の静けさみたいなものでしょう。

本誌でも特集していますが（**※注1**）インフレか、増税か、いつ、どんな形で起こるかはだれにも正確には言えないけれど、いずれ大きな変動がドカッとやってくる可能性は高いでしょうね。

ですから都会であろうと地方であろうと、これからはどこの家庭でも、400万円くらいの年収で暮らさなくてはならない、そんな時代に突入することは十分にありえると思いますね。

伊藤：従来は日本全体が右肩上がり成長の中にあって、個人のマネープランも、それに乗っていれば収入も右肩上がりで増えていくだろうという前提のもとに考えられていました。

たとえば今までは、「自分は40歳頃には課長になれるだろう」「退職金は3000万円くらいはもらえるだろう」といった前提のもとに、2000万円、3000万円といった長期の住宅ローンを組んだりしていたわけです。

ところがリストラは珍しくないし、年功序列の賃金体系も崩れてきています。年金や退職金も減額される方向にあります。

資産運用も同様で、ゼロ金利で預貯金にほほとんど利子がつかない状況ですし、積立型の生命保険も、保険会社の破綻などで予定利率が履行されないケースが相次いでいます。生保業界全体の予定利率の引き下げの容認も議論されていますね。

（**※注1**）第5号・「どうなる？――日本の財政、どうする？――私たちの資産運用」参照。

代の
ニング

そんな幸福な時代
と年収400万円、
を迎えつつある。
の時代、私たちは

て動き出すところ
ろうか。

和泉昭子
（ファイナンシャルプランナー　本誌編集委員）

澤上篤人
（ファンドマネジャー　本誌編集委員）

そんな中、従来の右肩上がり成長を前提としたマネープランはもはや成り立たなくなっています。

そこで今日は、この変動の時代を生きていくための、これからの新たなライフプラン、ライフデザインの形について話し合ってみたいと思うんです。

生活のゼイ肉を削ぎ落とすと断然、楽になる

和泉：この変動の時代を生きのびるためのライフプランについてはいくつかの基本的な条件が挙げられると思いますが、中でも特に意識しなければならないのは、もはや「人並み」の暮らしぶりというのはありえないということですね。

伊藤：周囲を見て右ならえ式ではなく、それぞれの人が独自に自分でライフプランを考えなければならないということですね。

和泉：常々、いろいろな方の相談に応じているんですが、すでに「平均的」というライフプラン自体が存在しないということを痛感しますね。

先日もある新聞社から、「ライフプランのモデルを作りたいので、一組の夫婦が一生のうちにどれだけのお金が必要なのかを教えてくれませんか」という依頼を受けたんです。

それで、夫婦2人が2人の子どもをもうけて、平均寿命まで生きた場合に必要とされるお金の額を計算してみたんです。

現在手に入るいろいろな統計の平均値を元に計算したんですが、主な項目を挙げますと、まず結婚費用が360万円、そして子ども2人分の出産資金が100万円となります。住宅資金は諸費用込みで4000万円の物件を購入した場合、金利3%、30年返済だと利子と元金で約5600万円となります。

教育資金は子ども2人を幼稚園から大学まで進学させると1900万円くらいかかりますが、これは小学校から高校まで公立に通わせた場合の数値です。

食費や被服費、水道・光熱費など現役時代の生活資金は約1億円かかり、老後の夫婦2人の生活資金は7600万円程度（1ヵ月の生活費を30万円とした場合）かかります。

これに介護費用、それに葬儀費用などの死亡整理金、医療費、基本的な保険料などを合計すると、大体2億8000万円くらい必要だということになったんです（**次ページ・表1**）。

澤上：平均値とはいえ、かなりの額ですね。

和泉：しかもこれは、税金や社会保険料、自動車関

表1「平均的」ライフプランでは、一生涯にこれだけのお金が必要！?

支出項目	金額	備考
結婚資金	360万円	結納、婚約～新婚旅行にかかった費用の全国平均（結婚情報誌の統計を参照）
出産資金	100万円	2人分
住宅資金	5600万円	諸費用込みで4000万円の物件を購入した場合。自己資金1000万円、住宅ローン元金3000万円と支払利子総額（金利3%、返済期間30年、ボーナス返済なしの場合）の合計。団体信用生命保険料、特約火災保険料などは考慮していない
教育資金	1877万円	文部科学省のデータをもとに、第1子：幼稚園と大学が私立（理系）、第2子：幼稚園と大学が私立（文系）として試算
介護資金	400万円	要介護状態3で3年間夫婦2人が介護を受けたとして試算。一部負担金・食事代・オムツなどの雑費の合計
死亡整理金	230万円	平成11年、日本消費者協会調べ。葬儀一式、寺院への費用、飲食接待費用の合計の全国平均。墓は含めていない
緊急予備資金	300万円	医療費・再就職活動などのための費用。ローンを含めた生活費の半年分
保障資金	750万円	夫：終身保障500万円、定期保障3000万円で、10年の更新ごとに1000万円ずつ減額し、30年継続した場合（更新時も現在の料率で試算）。医療保障は日額1万円。妻：日額5000円として試算
現役時代の生活資金	1億980万円	総務省家計調査（平成13年度）の勤労者世帯の1ヵ月平均生活費をもとに、教育費と住居費を除いて試算
老後の生活資金	7600万円	夫婦2人の生活費30万円／月（妻1人期は7割）として試算
合　計	2億8197万円	

※税金・社会保険料は、考慮していない。またインフレ率は考慮せず、現在の制度、価格が続くものとして試算。ほかに、人によって損害保険費用、車関連費用、大型レジャー費用、住宅リフォーム資金、子どもの結婚援助資金、相続税納税資金などが必要。

連の費用、大型レジャーや住宅リフォームなどの費用は含まれていませんし、数値も統計値が複数あった場合、できるだけ低い控えめな方を使って積算した結果なんですよ。

伊藤：日本人の平均的な年収は550万円くらいですから、いろいろな変動は考えられるけれど、生涯賃金に換算すると2億円くらいでしょうか。

そう思って見ると、これだけのことが一通りできる人というのは、かなり恵まれているということになるんじゃないでしょうか。

和泉：ですからこれは裏返して見ると、そもそも多くの人にとって、「全部人並みに」という生き方は無理だということなんですね。

その時も結局、「実際にぴったり当てはまる人なんてほとんどいないんだから、数字でモデルを作ってみても意味がないんじゃない」という結論になりました。

ではどうしたらいいのかというと、やはりそれぞれの人が、自分の実状や希望に合わせて、各々生き方を工夫しなければならないということだと思います。

伊藤：そうですね。右肩上がりの拡大路線ではあまり意識しなかったけれど、経済の基本原則というのは限られた資本や資源を、いかに効率的に利用して

利益を得るかということで、これは企業だけでなく、個人の場合も同じですね。

ですから漫然と周りに合わせるのではなく、自分で選択しなくてはならないわけです。それには仕事の選択も家族のあり方も、一体自分は何にもっとも価値を置くかということをギリギリまで考えて、考え方を鮮明にしておく必要があります。

たとえば住宅だったら、今までは30代くらいでローンを組んでマンションや一軒家を買うというのが一般的でしたが、現在は長期のローンを抱えるのは、非常な人生のリスクになっていますね。

ならば、若いときはできるだけ安い賃貸住宅に住んで、定年になって通勤などの制限がなくなってから地方で終の住処を安価に購入するといった、自分なりの工夫が必要です。

和泉：それから大学の進学費用も、子どもと折半にするとか、就職後に返済するような形で子どもに全部出させるとか、いろいろな選択肢の中で考えていく必要がありますね。

「子どもの教育費だけはどんなことがあっても出してあげたい。絶対に不自由はさせたくない」という人もいますが、その場合は、代わりにレジャーなどをあきらめなくてはならないわけです。

自分にとって必要なものは何か、優先するものをそれだけシビアに選ぶ必要があるということです。

伊藤：今までだと、「年収が下がってしまった、どうすればいいんですか」と訊ねられた時に、「では、保険を見直しましょう」とか、「住宅ローンの繰り上げ返済を検討しましょう」と答えていたわけですが、もうそういったレベルで収まらなくなってきています。

結論としては、生きる上での価値観の転換ということにまで発展してくると思います。

澤上：それって、すごく大切なポイントですよね。

実際問題として、どれもこれも人並みになんてできないんだから、不要なものは切り捨てていかなくてはならない。いわば「切り捨てる生き方」の時代が始まっていると思います。

でもこれは、切り捨てなければいけないから、貧しくなるかというと、全然そんなことはないと思います。逆に、今まで抱え込んできた不要なものを削ぎ落として、贅肉がとれて生きやすくなる面の方を僕は強調したいと思うんです。

たしかにこれは、「みんながやっているから」とか、「世の中ではこれが当たり前」といった価値観で生きている人にはとてもつらいことでしょう。

それでもいずれ、世の中の流れの中で追い込まれて、否応なく手放さざるをえなくなる。その中で「なんだ、400万円でもできるじゃん。いらないものを切り捨てると、かえって身軽になって楽に生活できるようになったな」という格好で、新しいスタイルがポン、と生まれてくるように思います。

考え方の軸が変わると、生きるのもうんと楽になると思うんです。

身軽になると
新たな行動に入っていける

和泉：同感ですね。

その「切り捨てる生き方」ということで思い出したんですが、実は私、先日はじめて「損切り」というものをしてみたんです。

信じられないかもしれませんが、今まで私は運用で損をしたことがないというのが自慢だったんです。まあ、実際は含み損を損として確定しないだけだったんですけどね(笑)。

それで何て言えばいいんでしょう、自分のやってきたことをある時期、ある時期で見直して、きちんと一回確定させて正しく認識するということはすごく大事だなと思いました。

澤上：すっきりしたでしょう(笑)。

やってみると悶々としたものが晴れて、動きやすくなるんだよね。我々は将来しかないんだから、将来に向かって動くということが大事。

これは運用だけでなく、生きていく上でも同様だと思うんです。

いろんなものを抱え込んで考えてばかりだと、動けないと思い込んだり、これしかないとか思ってしまう。けど、いったんすっきりさせて、自分で動きだしたら、意外に「こういうこともできた」「あんな考え方もあるわな」と発見できる。これが面白いの。そうすると、すごく楽になるしね。

そしてこの損切りで大切なのは、あまりあれこれ計算しないことですね。

すでに失ってしまったものを、ごちゃごちゃと考えていても仕方がない。それよりも「何とか生活で

きるならいいじゃないか」という格好で、将来の可能性の方を見て、さっさと行動していくことです。すると結果的に、儲かったり得をしたりすることが多いという感じです。

和泉：あえて計算しないならいいんですけど、今までは負の面を見たくないから見ないみたいなことだったんですね。

けれど今は、過去に引きずられないで、新しい可能性があるところに行こうというのが大切だと思っています。

何かマイナスを見ないふりをしていた今までの自分が、すごく小さく見えました。

澤上：そうそう（笑）、まったくその通り。

僕の友人にも3年とか4年で仕事を変えて生きている人がいるんです。といっても、無責任なんじゃなくて、革新派の政治家を意気に感じたら秘書になって応援したり、その人が偉くなって保守化してきたらさっさと辞めて自分でビジネスを始めたり、とても真摯なんです。一ヵ所にしがみついていない、一種の自由人です。

彼が言うには、盛大にビジネスをやっていた若い頃に比べて収入は大分落ちてきているのに、住むところは良くなっている、というんです。

どういうことかというと、「若い頃は見栄もあって車を乗り回していたけれど、電車とタクシーで移動すればいい」「つき合いもいろんな所に顔を出す必要はなくて、大切な人とだけ交際していればいい」とムダなものを削ぎ落としていったら、かえって生活の質は上がっていったということなんです。

「キャリア」の概念を拡張してみよう

伊藤：そういう贅肉のない自由人的な生き方って、これからの時代はとても大切になりますね。

今、フリーターが全国で400万人くらいいるそうなんですが、僕は以前はこういう人たちを否定的に見ていたんです。なぜなら就職しなかったら、収入も安定しないのでライフプランの立てようもないわけですから。

でも実際にはフリーターと呼ばれる人たちも、やっぱり今までのガチガチの制度とか仕組みから解放されて身軽に生きたいという、そういう気持ちがあるということは僕も理解できるんです。「自分らしく生きよう」という意識の、一つの現れではあると思うんですね。

ただし、フリーターだとおそらくキャリアを磨くことは難しいし、結局、雇ってもらえるところを転々としなければならないから、自立した生き方とはいえないと思うんです。

そうではなく、会社とか組織に依存しなくても生きていける自分のコアになる能力とか技能を磨いていて、いざとなれば独立してやっていける財務的な能力もそなえていると、これからの変動の時代、自分なりの価値観に基づいた豊かな生き方が可能ではないかと思うんです。

ちょうど、澤上さんのお友だちの生き方ように、フリーターというより自由人的な姿ですね。

澤上：そしてそういう独立した個がたくさんいる社会こそが、しなやかで力強く、活力のある世界になるはずですね。

和泉：そうした独立した個を目指す上で、新しいライフプランのもう一つの柱として大切になるのは、「キャリア」についてのもっと広い考え方だと思うんです。

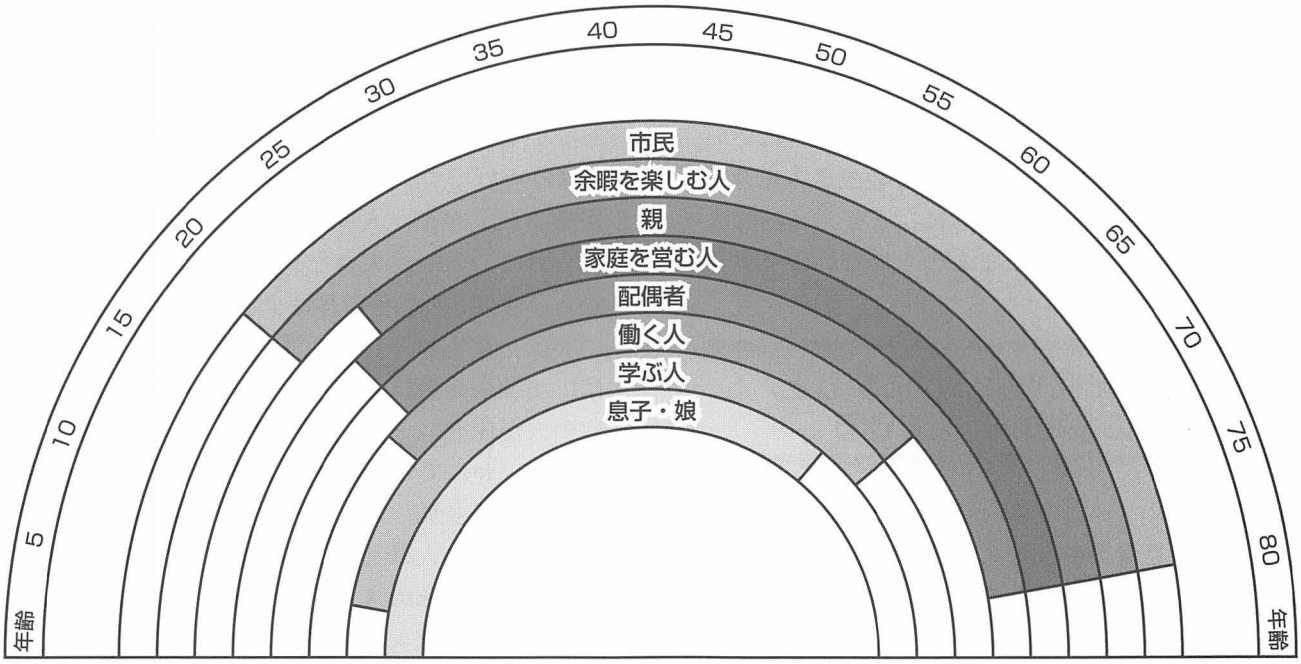
キャリアというと仕事だけに限定してしまうところがありますが、変動の時代はこれだけでは行きづまってしまいます。ですから、もっと全人格的にキャリアというものを考えてみようということです。

これはD.E.スーパー（**※注2**）という学者さんが提唱した「ライフキャリアレインボー（人生経歴の虹）」という考え方で、私は初めてこれを聞いたとき、目から鱗が落ちる思いがしたんです。スーパーによると、人間には基本的に八つの役割（キャリア）があるということなんです。

まず生まれたら、「子ども」という役割があるということです。それから成長すると「学生」という役割がありますね。さらに学校を出たら今度は就職して「働く人」になり、結婚すれば夫や妻、「配偶者」という役割があります。そして「家庭を営んでいく」

（※注2）D.E.スーパー（1910〜1994）：キャリアの概念を単に職業のみでなく、家族や社会の中における本人の役割にまで拡張し、キャリアガイダンスやキャリアカウンセリングの分野に大きな影響を与えたアメリカの教育学者。

【図1】あなたはどんなキャリアのバランスで人生を彩るか？
— ライフキャリアレインボーの一例 —



出典：Super,D.E.「A life-span,life-space approach to career devel opment」career choice and devel opment：applying cont emporary theories to practice.Jossey-Bass(1990)より

という役割があり、子どもができれば「親」になります。リタイアすると「余暇を楽しむ人」という役割があり、生涯の大部分を通じて「市民」という役割があるということなんです。

そしてこの八つのキャリアは、虹のように色々な長さと幅で人生を彩っていくという考え方なんです(**図1**)。

個人的なことですが、私はシングルで仕事のことばかりにエネルギーと時間を注いでいて、何か人生に物足りない感じがすることがあるのも事実です。でもそんな時に、別に結婚したり子どもを持たなくても、市民としての役割を広げたり、学ぶ人としてのキャリアを広げていくと、人生が豊かにできるのではないかと考えるとすごく力づけられるんですね。

これはおそらく男性の場合も同じではないかと思います。今までの典型的な男性社会では、仕事が人生の中心で、夫であったり、息子であったり、父親であったり、市民であるというところがスーッと細いまま生きている方が多いと思います。

それでリストラに遭ったりすると、「オレの人生は何だったんだ」みたいに落胆してしまう。けれど、自分のキャリアを多面的に意識できるようになると、別に自分の役割はいくつもあるんだから、「今度は夫や父親としての役割を全(まっと)うするように努力しよう」とか、「コミュニティへの貢献など市民としての役割を多く果たすようにしてみよう」といった発想の転換ができるわけです。

セミナーなどで「資産計画の基礎として、ライフプランを作りましょう」と言っても、子どもの学齢と定年退職の年齢しか書けない人が結構多いんですが、この八つのキャリアの話をしておくと、結構みなさん、オリジナルなライフプランが湧いてくるようです。

普通、シングルの若い人は「ライフプランを立てましょう」と言われても、ピンとこないんですが、「20代の後半に、何か社会や人のために役立つ活動をする期間を入れておこう。そのためにはいったん会社を休むけれど、その前にできるだけ資金を貯めておこう」といった感じで、いろいろとイメージできるようになるようです。

伊藤：そういう広い概念でキャリアを考えていくと、自分はどんなことがやりたいのか、職業とか働き方

もはっきりしてくるし、仕事の質も高まってくるでしょうね。

和泉：そうなんです。

「自分の家族にとって大切なことは何か」「どんな家族関係を求めているのか」「自分はどこに住みたいのか」「そのためには何歳くらいでどれだけ働けばいいのか」、今までは会社とか組織に自分の生き方を合わせてきたわけですが、今度は逆に、より主体的に人生を選択していけるようになるのではないかと思います。

最低必要年収を明らかにすると生活に余裕が確保できる

伊藤：先ほどの「ムダを切り捨てる生き方」とも関係しますが、変動の時代を生きる知恵としてもう一つ強調しておきたいのは、自分にとっての最低必要年収をきちんと把握しておくことですね。

生活していく上で絶対に必要なものと、そうでないものを峻別していくと、自分は最低限、どれだけの収入があればよいかが分かります。

そして、この最低必要年収が500万円でいいということが分かっていれば、そこから進退は自由に利きますよね。

年収が800万円あるとしたら、残りの300万円を運用に回せば効率的に財産づくりができるし、もしリストラか何かで年収500万円になったとしても十分生きていけますよね。あるいは、年収800万円の仕事をもっと余暇のとれる500万円の仕事に変えて、そこで得た時間をキャリアアップのための勉強に費やしたり、市民活動などに振り向けるといったことも可能でしょう。

同じ年収であっても、この意識に目覚めているのといないのとでは、生活の余裕に歴然とした差が現れてくるということです。

和泉：今までは漫然と収入に生活のレベルを合わせていましたが、これからは逆に、生き方の方に合わせて収入をマネージしていかなければならないというわけですね。

これは変動の時代をサバイバルしていく上で、とても有効な考え方ですね。

今、年収1000万円で働いている人がリストラに遭ったりして転職するとなると、本人はせいぜい落としても800万円くらいの年収は得られるだろうと思うそうなんです。ところが、転職コンサルタントの方の話では、実際は500万円くらいに下げないと再就職はとても無理だというんですね。

そんな時、年収に生活レベルを合わせる生き方をしている人は、あっという間に生活が行きづまってしまうわけです。

伊藤：収入が多い人は税金や社会保険料をいっぱい取られているし、大きなローンを抱える傾向があるから、意外と可処分所得は少ないんです。

実際、住宅ローンを延滞して破産する人というのは、高額所得者ほど多いんです。1500万円以上の年収の人が住宅ローンを延滞してしまうと、8割が破綻するといわれています。また1000万円の人の場合で6割だといいます。

年収の多い人ほど家計にムダなものを多く抱え込んでいるし、そのスタイルに慣れてしまっているので、ガクッと収入が減っても今までの価値観を変えることできないわけです。それで生活費はかかるし、何十万円ものローンを払わなくてはということで破綻してしまうというんです。

預貯金が1億円あっても安心ではない

澤上：今の日本で辛いのは、そんな高額所得者といわれる人たちでも、自分でものを考えて動ける人が少ないことですよね。

年収が高いとか資産があるといっても、会社とか社会システムのエスカレーターに乗ってきただけで、こういう人たちは驚くほど世の中の変化を知らないし、自分自身の主体的な価値観というものがないわけです。

伊藤：今まで日本人は、仕事も運用も消費も、とにかく外側に価値を求める生き方をしてきましたね。

みんなが持っているからということで、ブランド品に群がったり、大企業なら安心ということで就職したり、「みんなが買っていますよ」と言われて金融商品を購入してきました。消費も仕事も運用も、総じて自分で価値判断ということができません。

澤上：さっきの話みたいに、単に大企業で働いているというだけで、自分は年収800万円とか1000万円の能力があると思いこんでいる人がいっぱいいますよ

ね。こういう人たちは「不況だ、大変だ」と騒いでいるけれど、片や中小企業で工場の生産ラインを地道に支えているような人たちが、驚くほど少ない年収とか退職金で暮らしていることを知らない。

そして、そんな世の中の実態を知らない人たちが働き手であり、消費者でもあるという現状が続いている限り、やはり日本経済は脆弱な状態にとどまるといわざるをえません。

僕の友人なんですが、大手の家電会社を早期退職しているんだけれど、7000万円くらい金融資産をもっていて、それで「不安だ、不安だ」と言っている。でも、それだけもっていて何が不安なんだ、と(笑)。

ただし、たしかに彼が不安なのも理解できるんです。今お話しているライフデザインやライフプランの考え方も知らなければ、運用のことも知らないから動きようがないわけです。

実際、現在、1億円とか2億円程度のキャッシュを持っていたとしても、しかるべき行動をとらなければインフレの波を何回かかぶったり、増税があると、あっという間に目減りしてしまうでしょう。かといって、彼らが新たなる富の再生産をどれだけできるかもかなり疑問です。

ですから、日本の経済の構造が変わってくる次のラウンドでは、どこまでその資産や収入を維持できるのかまったく分からない。

「資産」を多面的な「人間の豊かさ」ととらえる

伊藤：ではどうしたらいいのか、ライフプランの立て方とか、運用の仕方とか、日々いろいろな相談を受けているんですが、やっぱり大切なのは、「資産」というものを単にお金や不動産だけでなく、もっと広く考えることだと思うんです。

結局、何のためのお金かといえば、できるだけ幸せに、豊かに暮らすためですよね。ですから「資産」というのは「人間の豊かさ」だととらえてみてはどうかと思うんです。

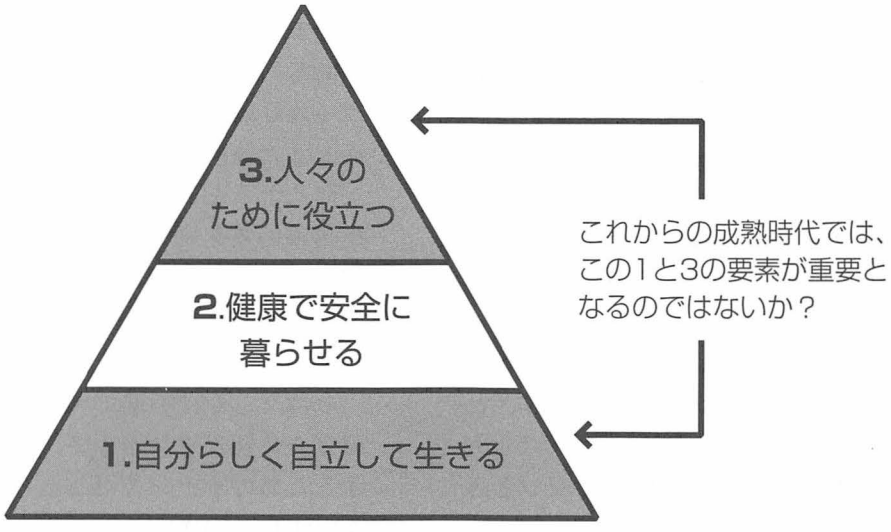
そうすると、資産には精神的な豊かさもあれば、生活文化の豊かさもあると考えられますよね。それに人間関係の豊かさ、健康の豊かさ、住む環境の豊かさも大切な要素です。

そしてこれらを実現する基盤として、経済的な豊かさが必要だということだと思うんです。

和泉：これからは給料も年金も退職金も、みんな減っていく中で不安な要素はたくさんあるけれど、反面、この「豊かさ」という視点で考えると、いろいろな解決の方策が見つかりそうですね。

公的な社会保障の質が落ちてきたとしても、みんなで助け合うようなセフティネットを築いたなら、金額としては見えないかもしれないけれど、これも

【図2】幸福に生きるための3つの要素



一つの資産であり、豊かさですね。

たとえば私はフリーで仕事をしているんですが、何か思い切ってリスクを取って新しい仕事に挑戦する場合、やっぱり心が弱くなることがあるんです。でもそんな時、「成功しても失敗しても、僕たちがセフティーネットを張って仕事も出すし、支援するから思い切ってやってごらん」と言ってくださる方たちがいるんです。こういう人間的なネットワークは、とてもありがたいもので、伊藤さんのおっしゃる意味での貴重な人生の資産でもあるわけですね。

伊藤：「幸福って何だろう」「良く生きるってどういうことだろう」といつも考えているんですが、これにはいくつかの要素があるように思っています（**前ページ・図2**）。

まず、自分らしく生きること、つまり自己実現できたり、自立しているということが挙げられると思います。

それから衣食住が足りて、健康で安全に暮らせることですね。

さらに人々のために何かするという社会貢献的なことも、幸福に生きる上での大切な要素だと思っています。

今、社会が成熟化してきて、とりあえず衣食住は足りて、昔に比べて健康とか安全といった面では大分恵まれてきているように思います。

ただし反面、自立して自分らしく生きながら、一方で相互扶助的な思いやりを持って生きるという面ではまだまだという感じがしています。

考えてみると特に戦後、日本人は物質的な豊かさを求めて、経済発展を至上命題に脇目も振らずに生きてきました。その中では個の自立とか、社会への貢献といった欲求を抑圧してきたように思います。

今の不景気は確かに辛い局面ですが、反面、そのことによって、自分自身で自覚的に人生を考えたり、あるいはNPOがたくさん設立されているように、民間で相互に助け合おうという動きが出てきていることは良いことだと思うんですね。

澤上：まったく同感ですね。

従来、大量生産、大量消費ということでガッチリと固めてきた経済や社会の枠組みが、今ガタガタと崩れていてみんな不安になっているけれど、だから経済が縮小するかというと、そんなことはないと思うんです。

かつての8%とか10%とかの成長は、もうないかもしれないけれど、もっとなだらかだったら十分ありえるんですよね。しかも公害を出したり、むやみな開発で自然を破壊したりというのではなく、もっと質の良い経済です。

たとえば景気対策ということで、膨大な税金が道路工事や建設事業に投じられているけれど、この効果ははなはだ疑問ですよね。そうではなく、もしその何分の一かでも新エネルギーの開発だとか、環境汚染の浄化、あるいは自然保護といった方向に使われていたら、社会にもたらす恩恵は計り知れないものがあったと思うんです。

ただしそこで必要なのは、伊藤さんがおっしゃるように、「個」の自立と同時に、その「個」が社会や周囲の人の幸福を意識しながら行動することですね。

伊藤：本誌第6号の編集後記でも少し触れましたが、「オルフェウス管弦楽団」というユニークなオーケストラがあるんです。どこがユニークかというと、何とこの楽団には指揮者がいないんです。コンサートマスターも曲ごとに変わります。

複雑な交響曲を、指揮者なしで一体どうまとめるのだろうと思いますが、曲についていろいろな解釈や奏法を持っているそれぞれのメンバーが、提案したり、時には議論しながらそれぞれのパートを合わせていって曲をまとめ上げていくそうなんです。

ですからとても時間がかかるんですが、仕上がるとそれはもう、ゆったりとした中に個々のパートが生きた、独特の味わいの曲なんです。

同じ曲でも、トスカニーニみたいに「この曲はこういう音なんだ」と独裁的というか、絶対的な価値観でまとめたものとはまったく違う響きです。

あるいはコンピュータの世界でも、ボランティアベースで草の根的に開発された Linux が、信頼性の面では Windows に優るという現象も起きています。

同じようなことが今の経済や社会でもいえて、中央集権的な組織の歯車になって動くというよりも、個々がそれぞれ独自によかれと思うことを考え行動することによって、もっと質の良い、成熟した経済や社会をつくることは十分可能だと思います。

今はたしかに不況で大変だけれど、僕らはこれを旧来の体制が崩れ始めて、よりよい経済社会へ脱皮するためのチャンスだととらえ、行動していきたいんですね。（了）